

オカリーナ学習による生涯学習（3）

——最初のグループを止めた人の「退会理由」とその後の学習実態——

加藤 いつみ

I. はじめに

筆者は、全国のオカリーナ学習者を対象に研究を進め、「オカリーナによる生涯学習(1)」^(注1)、「オカリーナによる生涯学習(2)」^(注2)として名古屋市立大学の研究紀要に報告した。その内容は、①全国のオカリーナグループの掘り起こし、②オカリーナ学習者の学習実態、③彼らの音楽的なバックグラウンド、④音楽の好み、⑤彼らが望む社会との関わり、⑥学習者の継続学習期間である。調査の結果分かったことは、オカリーナグループは、全国に500以上あり、その範囲は北海道から沖縄まで全国に渡っている。その学習者は、主婦が50%以上を占め、フルタイムで働く人もかなり多い。また年齢は、男性は60代、女性は50代の人が多く、小学生から80代の高齢者も含まれていた。学習者のうち15%は、以前に楽器を習ったことがあり、楽譜が読める人は30%である。また、78%はオカリーナの音色に魅かれて学習を始め、93%の人が学習を楽しいものと感じている、という実態を掴むことができた。しかし、最初のグループに入会しても、その学習継続期間は、全国平均3年2ヶ月という結果が出た。^(注3)この結果を得て、彼らのグループ所属期間の短さに大きな疑問を感じた。学習者の多くは、オカリーナに憧れて学習を開始し、練習を楽しんでいるにも拘わらず、なぜそんな短期間にグループを止めていくのか、そして止めた後のオカリーナとの関わり方に対して大変興味を覚えた。そこで今回は、グループを止めた人を対象にして、止めた理由は何か、そしてグループを止めた後はオカリーナの練習をも止めてしまったのか、あるいは最初のグループを止めても、新たな方法で学習を継続させているのであろうかなど、オカリーナと彼らの関わり方について追跡調査を試みた。作業を始めるにあたり、最初のグループを止めた人を探し出し、止めた理由、止めた後の学習の実態についてアンケート調査を実施した。その結果、止めた理由、止め後のオカリーナとの関わり方も個々に違うことが分かった。そこで、もう少し詳細な個々の情報を入手するために、アンケートに答えてもらった人の中から6名を選び出し、①子供の頃の音楽的環境、②最初のグループを止めた理由、③止めた後のオカリーナとの関わり方について、聞き取り調査を行った。

今回の報告は、最初のグループを止めた46名のアンケート調査から得られた結果と、その中の6名の聞き取りから得られた情報の2つを分析することにより、オカリーナ学習をしている人の音楽的なバックグラウンドやグループとして学習を行うための楽しさ、学習継続する上での問題点などを探し出し、これらを踏まえた上で、生涯音楽学習としてのオカリーナのあり方について考

察してみたい。

II. 最初のグループを止めた人の「退会理由」

1. 調査対象と調査項目

まず、止めた人についての情報を「中部オカリーナ協会」の名簿で調べたり、聞き込みで51名を見つけ出すことができた。その51名に調査用紙と調査に対する依頼文を添えて郵送した。調査期間は、2004年11月4日から24日の20日間である。51名中46名の回答があった。(90.2%)。

調査項目は、以下のとおりである。

1) 自身に対するお尋ね

①性別

表1.

②年齢と性別

表2.

2) 所属期間

表3.

3) グループにいた頃の活動

表4.

4) 楽しかったこと

表5.

5) 嫌に感じたこと

表6.

6) グループを止めた(休んだ)主な理由

表7.

7) 止めてからのオカリーナとの関わり

表8.

8) 継続期間

表9.

9) オカリーナについて感じていること

2. 調査結果

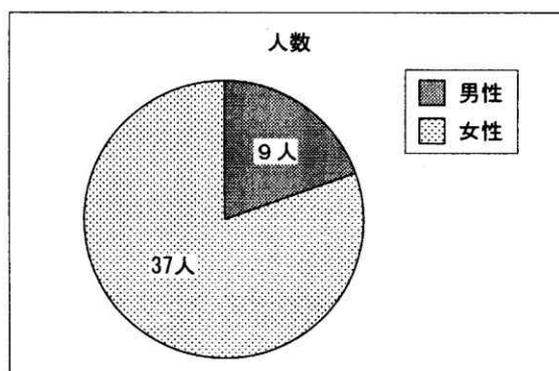
これらの調査を分析すると、次のような結果を得ることができた。

1) 自身に対するお尋ね

① 性別

表1. 「性別」は、調査対象46名の性別を表したものである。

表1. 性別



オカリーナ学習による生涯学習（3）

その内訳は、男性が9名（19.6%）、女性が37名（80.4%）である。彼ら46名は、名古屋近郊に住んでいる「中部オカリーナ協会」に属していた人々である。

② 年齢と性別

表2. 「年齢と性別」は、対象者の年齢を性別して表にしたものである。アンケート結果は、以下のとおりである。

表2. 年齢と性別

	30代	40代	50代	60代	70代
男性	0	0	3	5	1
%	0	0	33.3	55.6	11.1
女性	2	11	13	10	1
%	5.5	29.7	35.1	27.0	2.7
合計	2	11	16	15	2
%	4.3	24.0	34.8	32.6	4.3

表2. 「年齢と性別」から見ると、止めた人の多いのは、60代の男性で5名（55.6%）、女性は50代が多く、13名（35.1%）である。ちなみに筆者の2000年の学習者の年齢の調査によれば、男性は60代（28.9%）、女性は50代（43.2%）が多いから、この数値は学習者の数に比例している。^(注4)

2) 所属期間

表3. 「所属期間」は、学習者が最初のグループに所属していた期間を示すものである。

表3. 所属期間

	3年以内	3年～5年	5年以上	無回答	合計
男性	7	1	1	0	9
%	77.8	11.1	11.1	0	100
女性	10	15	11	1	37
%	27.0	40.6	29.7	2.7	100
合計	17	16	12	1	46
%	36.9	34.8	26.1	2.2	100

表3. 「所属期間」から分かるように、女性の方が所属期間は長い。女性の場合、3年から5年以上続けた人が26名（70.3%）あった。継続期間が3年未満の男性は、9名中7名（77.8%）であるところから、継続期間は女性の方が長いことが分かる。彼らの継続期間は、平均4.1年であり、この数値は、全国平均3.2年よりもやや長い。しかし、この数を金子敦子著「大正琴の世界」の中で調査された学習者と比較してみると、大正琴では10年以上続けている人が33.5%あり、その学習歴には大きな開きが見られた。大正琴には家元による資格制度があり、師範資格を希望する人は7年～10年の歳月をかけて課題を習得し

た後、試験を経て指導者として認知される。学習者の中には資格習得あるいは演奏家になることを目指している人が35%あるという。^(注5) その目的の違いが、オカリーナと大正琴の学習者の継続期間に関係してくるのであろうか。

3) グループにいた頃の活動 (複数回答)

表4. はグループに所属していた頃の活動について尋ねたものである。

表4. グループにいた頃の活動 (複数回答)

	項目	人	%
1	「協会」のフェスティバルに出演	39	84.8
2	地域の行事	25	54.3
3	センター祭り	16	34.8
4	施設・学校での演奏	24	52.2
5	その他	6	13.0

表4. 「グループにいた頃の活動」はグループに所属していた頃に参加した行事について記述してもらったものである。対象者の約85%近くは、「協会」のフェスティバルに出演している。この行事は、「協会」の会員が一同に集い、グループ単位で演奏を披露していくコンサートである。2005年は第11回目にあたり、「ウイルあいち」で36グループの参加で開催された。コンサートホールで演奏するという意味において、会員たちが最大の楽しみとしている行事である。2番目は地域の行事に参加した人が多く、25名(54.3%)と続く。センター祭り・施設・学校などの地域での活動に参加した人は40名とかなり多い。

4) 楽しかったこと (複数回答)

表5は、グループに所属していた頃、楽しかったことについて記述してもらったものである。

表5. 楽しかったこと (複数回答)

	項目	男性	女性	合計
1	皆で演奏ができたこと	3	14	17
2	ステージで演奏ができたこと	2	10	12
3	合奏での音の重り		10	10
4	新しい曲が吹けるようになったこと	1	7	8
5	多くの人と交流ができたこと	1	6	7
6	皆に喜んでもらったこと			3
7	山歩きに持っていったこと	1	1	2
8	その他		4	4

表5. 「楽しかったこと」は、男女ともに<皆で演奏ができたこと>を挙げている。こ

オカリーナ学習による生涯学習（3）

の〈皆で演奏ができたこと〉は、皆で気持ちを一つにして演奏した結果、仲間同士の結びつきを感じる事が出来た喜びであろうか。又、練習を続けてこそできる〈新しい曲が吹けるようになった喜び〉〈聴いてもらい、喜んでもらえる満足感〉など、成し遂げた喜び、自分の技量が上がった喜びを27名の人が楽しいと感じている。

5) 嫌に感じたこと

グループに所属していた頃、嫌に感じたことをについて尋ねたものである。

表6. 嫌に感じたこと

項目	男性	女性	合計
指導者の人間性と指導法	2	5	7
次々に止めて人が減ったとき	1	3	4
会の雰囲気	1	2	3
金銭的な面での指導者との考え方の相違		2	2
演奏曲がむずかしくなってきた	1	1	2
技量の個人差		2	2
場所・日程がよく変わる		2	2
うまく吹けなくて落ち込んだとき		2	2
世話役・場所取りが嫌だった		2	2
外部への出演がきつかった		1	1

表6.「嫌に感じたこと」は、胸のつかえを吐き出すように綴った人が何人もいた。〈指導者の指導法〉と〈出演のお礼金に対する指導者との考え方の相違〉など、指導者とのわだかまりが原因でグループを止めてしまった人もあった。次々に人が止めて会が寂れていくことに対して「嫌」というよりは、寂しさを感じた人もあった。意外な回答として〈世話役、場所取り〉が嫌で止めていく人もあった。生涯学習センターを練習場として自主運営をしているグループにとっては、世話役が回って来るのは当然なことと思われる。彼らにとってはそれが負担となるのであろうか。しかし、自主運営のメリットも考慮されなければならない。彼らの一月分の必要経費は、平均一人当たり2995円と少ない負担ですんでいるからである。^(注6) 〈外部への出演がきつかった〉と回答している人があるように、年齢や健康面において、外部での依頼演奏に応じることを負担に感じている人もあった。

6) グループを止めた（休んだ）主な理由（複数回答）

次に、グループを止めた主な理由を次の8項目から選んでもらった。

表7. グループを止めた(休んだ)主な理由(複数回答)

	項目	男性	女性	合計
1	時間的に忙しくなった	3	16	19
2	自分・家族の健康上行けなくなった	1	13	14
3	指導者の意向、選曲が合わなかった	2	6	8
4	レベルが難しすぎる	3	5	8
5	別の習い事をはじめた	2	4	6
6	会の中の雰囲気合わなかった	2	3	5
7	転職、移動などで通うのが不可能	2	1	3
8	月謝(必要経費)が高い	0	2	2
9	その他	1	11	12

グループを止めた理由としては、19名が“忙しくなった”としている(37.3%)。この中には、本当に忙しくなった人、本当の理由は秘めて、当たり障りの無い“忙しさ”を理由に挙げた人もあった。又、自分の健康や家族の健康で継続できなくなった人も14人あり(27.5%)、その中には、自分の病気で致し方なく止めた人もあった。指導者サイドに問題を感じて止めた人も12名あった(23.5%)。それは女性に多く見受けられたが、その問題は、外から依頼を受けて演奏した場合にももらった謝礼のことが主である。指導者は、自分が指導したから自分がもらうのは当然だと思ひ、全額を懐に入れてしまう。一方学習者は、演奏依頼を受け、出演したのは自分達であるから、配分について相談があってもいいのではないかと思う。そういった事が重なるにつれて、不満が募り、行くのが嫌になって止めてしまった、と書いた人が2名いた。男性の中には、5名のうち3名が“難しい”という理由で止めている。オカリーナの音色に憧れを持って学習を始めた人の中には、楽譜が読めない、リズムがとれない、といった問題を抱えている人がかなりいる。そういった人がグループの人たちと同じ時間帯に、同じ教材で学習していくことには無理があるのは当然のことである。このことは、オカリーナのみならず、グループ単位で練習する全てが抱える問題ではなかろうか。指導者、グループの者がその人にふさわしい手を差し延べること、本人も吹くことのみならず、絶えず音楽を聴き、身の回りに音楽のある生活を心がけ、そして音楽の理論的な部分を学習するような努力が必要ではなかろうか。

オカリーナを止めてく別な習い事をはじめた>2名の60代の男性は、男の料理教室、笙、マジック、リコーダーを始めている。一方女性は、40代の2名がコーラスを、70代の1名がフルートを学んでいる。現在の日本では、自己の生きがいのために趣味や教養の生涯学習を行っている人は53.0%あるといわれている。^(注7)彼らもその一人であろう。別な習い事をはじめた6名のうち5名が何か楽器や歌うことに関わっているところから、オカリーナをしていた人は、もともと音楽の好きな人ではなかろうか。

オカリーナ学習による生涯学習（3）

7) 止めてからのオカリーナとの関わり（複数回答）

表8. は、グループを止めてからのオカリーナとの関わりについて尋ねたものである。

表8. 止めてからのオカリーナとの関わり（複数回答）

項目	男性	女性	合計
他のグループに入った	4	11	15
気の合う人でグループを結成した	1	7	8
個人レッスンを受けている	0	4	4
元のグループに戻った	0	1	1
気の向いた時に吹いている	5	17	22
ほとんど吹かない	2	10	12

表8. 「止めてからのオカリーナとの関わり」から分かったことは、最初のグループを止めても他の方法で学習を継続させていることである。別のグループに入った人は15名（32.6%）、気の合う人でグループを結成した人は8名（25.0%）、個人レッスンを受けている人は4名（12.5%）、元のグループに戻った人は1名（3.1%）あった。つまり最初のグループは止めたけれど、学習自体は継続させている人が28名（60.9%）いる、という結果が得られた。止めた人のうち60%以上の人々が、別な環境の中で学習を継続させているのは、筆者にとって意外な発見であった。この現象は楽器の持ち運びが容易であること、楽器、奏法、楽譜が流派に捉われなく共通していることが、何処へいっても、新たなグループに溶け込むことができる、というオカリーナの持つ特性からくるものであろうか。オカリーナ以外の楽器を学習している人もこういった結果が現れるのであろうか。今後の研究に結びつく課題と思われる。

8) 継続期間

グループを止めた後、別の方法で練習を継続していると答えた28名について、その後の継続の実態を尋ねた。表9. は彼たちの継続期間を示したものである。

表9. 継続期間

	1年以下	2～3年	4～5年	6～7年	8年以上	不明
男性	0	2	2	0	0	1
女性	10	5	1	4	1	2
合計	10	7	3	4	1	3

継続している28名中25名は継続年月が書かれていた。それによると、一年以下の女性が多く10名あった（40.0%）。中には8年以上続けている学習者もいた。

9) オカリーナについて感じていること（複数回答）

学習者の46名に、オカリーナに対して感じていることを書いてもらった。彼らのオカリーナに対する感じ方は次のようなものである。

① 演奏面において

- ・吹き方が多少分かってきて楽しめるようになった。(21)
- ・奥が深い。(15)
- ・手軽に持ち運びできるのがよい。(8)
- ・野山や旅先で吹きたい。(4)
- ・サイズの異なる楽器でのアンサンブルの楽しみが増した。(3)
- ・世代を問わず手軽に扱える楽器である。(3)
- ・人の演奏がゆったりと聴けるようになった。(2)
- ・いい質の楽器が増えてきた。(2)
- ・ラジオから聞こえてくる音色にうっとりする。(2)
- ・一種の民族楽器である。
- ・演奏する際ソロの方がふさわしい。
- ・音色の魅力。
- ・音域が狭いのが欠点。
- ・ギターなど他の楽器と合わせても魅力がある。
- ・福祉センターで唱歌を吹くと喜ばれる。
- ・もっと気軽に吹きたい。
- ・オカリーナの音色に気づくようになった。
- ・今は吹いていないが、身近な存在と感じる
- ・旅先で吹くとそれがきっかけで会話が始まる。
- ・宗次郎のコンサートを聴いて幸せを感じる。

② 健康面において

- ・健康上いい。(2)
- ・体力を必要としない。

③ 感じる負担・マイナス面

- ・外への演奏は体力的について行けなくなった。
- ・C管以外に別な調の管が必要になり、負担を感じる。
- ・練習をする時間的なゆとりがなくなった。
- ・先生が忙しくなりすぎて、教室の雰囲気落ち着かない。

④ その他

- ・レベルが高くなった。(2)

オカリーナ学習による生涯学習（3）

- ・グループがたくさんできて驚いている。（2）
- ・音量の小さなオカリーナが欲しい。
- ・移動した福岡地区には「協会」が無くて残念

学習者の記述から分かったことは表現の仕方は多少異なるが、＜楽しめるようになった＞人が多く（21）、＜奥が深い＞（15）、＜持ち運びが便利＞（8）などである。多くの学習者の学習動機は、＜オカリーナの音色が好き＞であったが、その好きなことを何とか自分なりに吸収して、一人でも楽しめる域まで達したようである。ある人は、それでよしとして学習を止め、気が向いた時家で吹く程度に留める。また、ある人は他のグループに入ったり、気の合う仲間グループを作ったり、個人レッスンを受けるなど、別な方法で技量のアップと楽しみの幅を広げている。奥が深いと回答した人は、主として学習を継続させている人々であろう。別のグループに入ったり、気の合う仲間グループを作ったり、個人レッスンを受けたり、元のグループに戻ったりして学習を継続させている人たちが28名あった。また、気の向いた時に吹く人が22名あり、前者と合わせると延べ50名がオカリーナと関わりのある生活を続けている。これらの人々は、条件さえ整っていれば生涯を通して学び続けようとする姿勢が感じ取られた。オカリーナは、尺八や他の管楽器に比較すると吹けばすぐに音が出る楽器である。しかし、きちんと指穴をふさぐこと、正確なピッチ感を把握すること、タンギング、アーティキュレーションなどの奏法の段階まで踏み込むと決してやさしい楽器ではない。さらに自分で演奏曲を選び出し、アンサンブル用に楽譜を書き換えるような作業は、より専門的な知識と経験が必要とされる。

Ⅲ. 止めた6名の聞き取り調査

アンケートに協力してもらった46名のうち、条件の異なる6名を選び出し、個人的な聞き取り調査を行った。この作業を通して、①オカリーナ学習者の子供の頃の音楽的環境、②オカリーナを始めた動機、③最初のグループを止めた理由、④止めた後のオカリーナとの関わりについて聞き取った。これらの調査からオカリーナを学習している人の音楽的なバックグラウンド、受けた音楽教育、そして止めた理由、止めてからのオカリーナとの関わりがより明らかになった。

1) 調査対象

以下のAからFは、調査に応じてもらえた6名のリストである。

A. 名古屋市内に住む男性（64歳）	聞き取り日	平成17年9月5日
B. 名古屋市内に住む女性（70歳）	聞き取り日	平成17年11月10日
C. 愛知県内に住む女性（35歳）	聞き取り日	平成17年11月17日

- | | | |
|---------------------|-------|-------------|
| D. 岐阜県内に住む女性 (45歳) | 聞き取り日 | 平成17年11月17日 |
| E. 名古屋市内に住む女性 (61歳) | 聞き取り日 | 平成17年11月18日 |
| F. 愛知県内に住む女性 (59歳) | 聞き取り日 | 平成17年11月29日 |

A. 名古屋市内に住む男性 (64歳)

(1) 音楽的環境

彼は、子供の頃の音楽環境について「音楽が好きで、家でギターを弾いてく湯の町エレジー」などを歌った。人と話すことが苦手で、音楽は喋らなくてもいいから、楽器を弾いて一人で楽しんでた。父・母、兄弟共に音楽はやっていなくて、音楽的な雰囲気は子どもの頃からなかった。学校の音楽の時間は、小学校ではハーモニカ、中学校、高等学校ではアコーディオンをしていた。トランペットが好きで、これは自分でやっていた。オカリーナの学習を始める前から尺八を吹いたり、ギターを弾いていました。」と述べていた。

(2) 始めた動機

オカリーナは、1994年、53歳の時、生涯センターの講座で始めた。その動機について次のように述べている。「元来音楽が好きで、当時誰もやっていないから、チョット変わったことがやりたかった。楽譜は、すらすらとは読めなかったが、音がすぐに出て、“これならやれる”と思った。その後もラジオ、テレビから流れるオカリーナの音に刺激を受けた。そのとき学習した曲は、小学唱歌、賛美歌、外国曲であり、この種の音楽が好きである。継続期間は、8年くらい。その間にフェスティバルに6回程出演したし、最初からグループのお世話役をしていた役目上、グループを止めることが出来ず、これもグループ所属が長く続いた理由です。」と語っていた。

(3) 止めた理由

止めた理由について「いつまでやってもきりが無く、マジック、笙とか他にやりたいことがあったので潮時だと思って止めました。」と述べている。又、皆で施設訪問し、演奏する活動に対して負担を感じ始めた頃でもあった、という。

(4) 止めた後のオカリーナとの関わり

止めた後のオカリーナとの関わりを「トワイライトスクールにて、子ども達の前で週2回程オカリナを吹いています。」と述べている。そのほかに、5年ほど前にボーイスカウトの団長から笙を教えてもらい、結婚式や、神社での奉納の際、吹いて欲しいという依頼を受けてく越天楽」など奏する。「それが今の楽しみです。」とも言っていた。

B. 名古屋市内に住む女性 (70歳)

オカリーナ学習による生涯学習（3）

（1）音楽的環境

子どもの頃の音楽的環境について「子どもの頃は、母が縫い物をする横で針に触っていたので、何か縫うことが好きでした。娘になってから兄とハーモニカを吹いたり、二番目の姉がフルートをしていたので家の中は、いつも何かの音がしていました。」と述べている。また、小学校の音楽の時間については「軍歌を歌うこと、6年生になって竹で作った縦笛でく港>など吹きました。」と述べている。そしてオカリーナ学習以前に1990年頃から大正琴の練習を始めた。

（2）始めた動機

学習動機について「最初は、テレビかラジオで楽器の存在を知った。45年ほど前、松坂屋のショーウインドーに九谷焼のオカリーナが6500円で売っており、欲しくて何度も見に行ったが、高くて手が出ませんでした。35年ほど前、長女が取っていた学研の付録にプラスチックの“ポックル”と呼ばれるオカリーナがついてきて、興味半分に吹いたのがきっかけです。」と語っている。そして「35年ほど前、オリエンタル中村（現三越）にて3500円のピッコロ・オカリーナを買った。それを持って京都に出かけ、丸山公園で誰もいないのを見届けて吹いた。」その後、1994年、59歳のとき、社会教育センター主催の講座後に出来た自主グループに入った。「オカリーナで吹くのに好きな曲はく小学唱歌、ポップス>などです。」と語っていた。約3年半程続けて、1998年頃最初のグループを止めた。

（3）止めた理由

止めた理由を次のように述べている。「先生にかわいがられると、仲間からねたまれるし、先生と学習者との間がぎくしゃくしていて、先生の前では、いいことを言っても練習が終るとグチがでて、そのグチを聞くのが嫌でした。」そんなことが繰り返されるうちに、オカリーナは吹きたいけれど、そのグループに行くのが負担になり、しばらく休んでいた。幸いにも、比較的近くの生涯学習センターでやっているグループを見つけ、そこに移った。

（4）止めた後のオカリーナとの関わり

止めた後の関わりを次のように述べている。「やりたい、やりたいと思っていましたが、チャンスがなく、たまたま加藤先生に浄心を紹介していただき、1999年そこに入会しました。そこは、お年寄りが多くわきあいあいとしており、行くのが楽しみです。6年間続いているが、一度も止めようと思ったことはありません。」その生涯学習センターでは月2回、先生が指導に来ていて、ボランティア活動として、施設などに演奏に出かける。こんな訪問なども彼女の楽しみの一つになっているようである。

C. 愛知県内に住む女性 (35歳)

(1) 音楽的環境

小学校の頃の家での音楽教育について次のように述べている。「両親が音楽を聴くことが好きで、特にモーツァルトの音楽がよく流れていた。楽器店の音楽教室でピアノのレッスンを受けるなど、自分で意図的ではないが、偶然にも様々な音楽教育を受けることができたのは、現在になって有難いことだと思っています。」また、家庭以外の音楽教育について「学校では、中学校の時は、合唱部にいたため、腹式呼吸を習い、“発声”のトレーニングを受け、高校時代の音楽は、教科書に捉われない授業で、かなり詳しく楽典をやった。英語の専門学校へ行ったため、海外の音楽に触れるチャンスも多く、黒人の先生方が彼ら独特のリズム感で踊ってくれるのを見たり、外国の楽器に触れる事は少なかったが、様々なリズムがあるのだということを体感できた。」と述べている。

(2) 始めた動機

始めた動機は、27歳頃ヤマハの音楽教室に入会したことであり、「何処でも演奏が可能であり、優しく、素朴な音色が気に入った。好きな曲は、演奏する自分が心地よくなる曲とスローすぎないバラードである。」と語っていた。4年程続けて、2001年頃止めた。

(3) 止めた理由

「時間的にも、金銭的にもレッスンに通う事が負担になってきたことと、教室では自分よりレベルの低い人のサポート役になってしまい、楽しくなくなった。」このことが引き金になって止めた、と言う。グループに属していた頃は「協会」主催の演奏会に4回程出演した。

(4) 止めた後のオカリーナとの関わり

誘いを受けると演奏会のエキストラとして出演したり、韓国に演奏旅行に出かけるなど、かなり密度の濃い関わり方をしている。また、普段は、「気のあった友達と情報を交換したり、気に入った曲を吹くなど、＜個人の楽しみ＞に徹している。」と述べている。

D. 岐阜県内に住む女性 (45歳) の場合

(1) 音楽的環境

「子どもの頃から音楽や体育が好きで、小学校の頃、楽器店の教室にてピアノのレッスンを受けた。学校教育においては、小学校の音楽教育の中では、合唱、ハーモニカ、リコーダー、音楽鑑賞などを学び、中学・高等学校では、合唱、リコーダー、音楽鑑賞などの授業を受けました。」と述べている。

オカリーナ学習による生涯学習（3）

（2）始めた動機

彼女の動機は、「1996年、36歳の頃多治見市の学習館で主催されたオカリーナの講座に参加した。講座の終了後、自主グループでき、そこで演奏する暖かいのびやかな曲やリズムカルな曲が好きで、入会することにしました。」その間「協会」主催の演奏会にも出演した。グループに約7年程在籍し、43歳の時止めた。

（3）止めた理由

指導者が小学校の非常勤として勤務を始めたために「曜日と時間帯が変わり、自分の通える日時ではなくなったため、しかたなく止めました。」と語った。

（4）止めた後のオカリーナとの関わり

「自宅で好きな時に吹いたり、声をかけてもらった時に演奏に参加する程度です。」と述べている。

E. 名古屋市内に住む女性（61歳）

（1）音楽的環境

彼女は、うたを歌うことが下手だったため、音楽が好きになれなかった。「小学校の頃は音楽が嫌いだった。学校では、ハーモニカを吹いた記憶がある。中学校、高等学校では美術を選択し、音楽には縁が無かったし、音符を見たら拒絶反応が起きるほど、音楽が嫌いだった。兄は絵を書くこと、父は銀行員で、株に凝っていたために家庭には音楽的な雰囲気は無かった。音楽とのかかわりは、せいぜい自分で鼻歌を歌う程度でした。」と語っていた。

（2）始めた動機

1994年50歳の頃、たまたま近くの支所で開かれたオカリーナ講座に参加した。6回の講座で20名程の参加者でスタートした。やっているうちに“そんなに難しくない”、“音が優しい”、これなら続けられると思った。講座が終了した時点で、自主グループの話が持ち上がった。グループに属していた頃、「協会」主催のコンサートに第2回目から出演した。その他、西春の名鉄や支所の文化祭で演奏したり、一粒荘にボランティア演奏に出かけた。オカリーナで吹く好きな曲は、＜里の秋、学生時代、アメージンググレース、冬のソナタ、世界に一つだけの花＞など、落ち着いた曲です。」と語っている。

（3）止めた理由

「1998年の＜ねんりんピック＞のステージを契機に止めようと心に決め、出演した後に止めました。」又、基礎が無いと、合奏の時など「入れなかつたり、出遅れたりして皆に迷惑がかかる。」と語っている。それから、「先生の譜面がその場で変わり、練習して行ってもやる気をなくしてしまいました。」とも語っていた。グループ活動は4年

間続けたが、54歳の時に止めた。

(4) 止めた後のオカリーナとの関わり

「楽しみで、ほとんど毎日12時から50分くらい吹いている。ディサービスとして施設に一ヶ月毎に吹きに行く。一緒に歌ってもらえると嬉しい。主人と車で出かけるときは、いつもオカリーナを持っていき、人のいない所で吹く。主人は、聞いてくれて、いろいろと感想を言ってくれる。」こんな喜びを語っていた。

F. 愛知県内に住む女性 (59歳)

(1) 音楽的環境

「音楽が好きで、その中でもうたを歌うこと、楽器を弾くことが好きであった。母が音楽好きで、大きなステレオがあり、レコード盤がたくさんあった。越路吹雪に憧れて、コンサートに行きたかったが、チケットが取れなくて実現しなかった。母は<岸壁の母>が好きでよく歌った。2人の兄も歌うことが好きで、よく歌っていた。」と、家庭環境を語っていた。また、学校教育においては「小学校の音楽教育の中では、合唱をしていた。音楽教室では歌と木琴を習っていた。中学校・高等学校では合唱、短大ではギターをやった。」というように、家庭や学校において恵まれた音楽環境のもとで子供時代を過ごした様子が伺える。

(2) 始めた動機

「1997年、51歳の時、公民館でオカリーナの講座が始まり、それに参加したのがきっかけです。」と語っていた。「オカリーナの音色が好きであったし、手軽に出来ると思ったから、自主グループになってからも参加しました。」練習の目標は、「クラシックの曲や、宗次郎が根尾村で吹いた曲が好きで、それを練習しています。」と述べている。

(3) 止めた理由

「演奏した際の<お礼>を指導者が独り占めしてしまい、報告など一切無かった。演奏後のお茶代など、指導者は<お礼>をもらっているにも拘わらず、学習者の負担となった。演奏会をするから必要経費といって、突然一人5000円を請求されたこともあった。会の責任者という立場にあったが、その行為に対して抗議する勇氣も無く、だんだん指導者の人柄が嫌になり、2003年ついに止めることを決心した。」と、当時のつらかった思いを吐き捨てるように語った。

(4) 止めた後のオカリーナとの関わり

グループは止めても、オカリーナは吹きたかったので、一年程たって、近くのオカリーナの先生に個人指導を受けるようになった。「レッスンは月二回。一回のレッスンが一時間半ほどで10,000円。先生からオカリーナの指導のみならず楽譜をオカリーナ用に

オカリーナ学習による生涯学習（3）

書き換えてもらって、宗次郎の吹いた曲など練習している。」と、満足した様子で話していた。

IV. 聞き取りの整理

以上、個別面接の結果から得られた6名の聞き取りを整理してみた。

	始めた時	止めた時	所属期間(年)	オカリーナ以前の音楽学習	止めた主な理由	止めた後のオカリーナとの関わり
A男	53歳 1994年	61歳 2002年	8	ギター、トランペット	他にやりたいことが出来た	トワイライトスクールへ吹きに行く
B女	59歳 1994年	63歳 1998年	3.5	大正琴	指導者とのぎくしゃく	別なグループに入っ て継続中
C女	27歳 1997年	31歳 2001年	4	ピアノ	時間的、金銭的な問題	好きな時吹く、助っ 人として演奏に参加
D女	36歳 1996年	43歳 2003年	7	ピアノ	指導者の都合によ り練習日の変更	好きな時吹く、助っ 人として演奏に参加
E女	50歳 1994年	54歳 1998年	4	無し、音楽が嫌い	リズムに乗れない 楽譜がよく変わる	毎日1時間程度吹く。 施設に吹きに行く
F女	51歳 1997年	58歳 2004年	7	うた、木琴	指導者との金銭的 な問題	個人レッスンを受け ている

上記の人々は、オカリーナ開始年齢は、50代が4名、30代が1名、20代が1人という結果が出た。最初のグループでの所属期間は、平均5年6ヶ月という結果が得られた。この記録は、全国平均の3.2年、先の46名の学習者の4.1年よりは、かなり長い。子供の頃の音楽学習は、6名中5名が楽器を学んでいる。その5名は、音楽が好きで、子供の頃何か楽器を学んだ経験から、ある程度の音楽的な基礎知識を持っていたであろう。楽譜を読むこと、拍子を取ることなどの基礎知識は、音楽学習には欠かせないものであり、彼らの子供時代の蓄積は、成人してから踏み出す新たな学習の糧となっていることが分かった。また、逆にE女（54）のように、家庭に音楽的な雰囲気はなく、子供の頃から音楽が嫌いで、楽譜を見ると拒絶反応を起こす人も1名あった。彼女の場合は、自身で鼻歌を歌うくらいで、学校でもハーモニカを吹く程度の乏しい音楽環境であった。子どもの頃の音楽教育の不足は、大人になって学習を始める際に「楽譜が読めない。リズムに乗れない、自分の入る個所で入れない」など、音楽の基礎的な部分に問題が生じる。しかし彼女はグループを止めてからは、12時から50分間の練習を日常のスケジュールの中に定着させ、ほとんど欠かしたことが無いという。また、ご主人とドライブに行く時は、いつも楽器を持参し、人のいない所で吹くなど、オカリーナが生活に溶け込んだ数少ない例である。彼女の場合は、苦勞して習得した技術であり、＜自分でも出来る＞という確信を得た初めての音楽の楽しみであり、それらがかけがえの無いものとして、彼女の人生に自信と喜びを与えているのであろう。

「止めた主な理由」は、他にやりたいことが出来た、指導者とのぎくしゃく、時間的、金銭的な問題、指導者の練習日の変更、リズムに乗れないなど、それぞれに異なっていることが分かった。指導者やグループの間に何らかの問題を感じて止めた人は4名、自分サイドの問題で止めた人は2名であった。指導者との金銭的なもつれ、配慮を欠いた教材の選択や変更、ちょっとした言葉使い、練習日の変更など、大人同士がグループになって学習する上でのむずかしさを知った。

V. まとめ

以上、学習を止めた46名のアンケート調査と、その中の6名についての聞き取った内容を整理してきた。グループとして学習を行うための楽しさ、学習継続する上での問題点などを探し出した上で、生涯音楽学習としてふさわしいオカリーナのあり方について考察してみたい。

- (1) 学習者は、“皆で演奏ができたこと”、“ステージで演奏ができたこと”、“多くの人と交流ができたこと”を喜びとしている。
- (2) 今回の調査では、46名の学習継続期間は、4.1年、そして6名の継続期間は、5.6年という結果がでた。
- (3) 止めた理由は、<時間的に忙しくなった><自分や家族の健康上行けなくなった><指導者とのぎくしゃくした問題>を挙げている。
- (4) 止めた後は、61%の人が、<別のグループに入った><気の合う人でグループを作った><個人レッスンを受けている>など、学習を継続させている。気の向いたときに吹いている人をあわせ87%とかなりの人が吹いていることが分かった。

生涯学習の一環として音楽学習が法律化されたのは、1994年に発布された「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律」(略して音楽文化・教育振興法という)であり、比較的日子が浅い。この法律は、音楽が人々の生活に潤いを与え、国際理解と交流に大きく貢献することを考慮し、人々の音楽活動を生涯学習の範疇でとらえ、その中から音楽文化の振興を図ろうとしたことに大きな意義が認められる。こうした環境が整えられることにより、一般市民が音楽に接する機会が増え、音楽の学びが身近な存在となり、音楽活動を通して、生活の中に楽しみと喜びを見出すことが多くなった。2003年の朝日新聞の「四十の手習い 遅くない」によれば、楽器を習い始めたのは、ほぼ半数が10歳未満であるが、“退職金で自分へのご褒美としてピアノを購入した”という83歳の女性や、“郊外に家を建てたのを機に、40代からサクソフォーンを習い始めた”54歳の男性や、“沖縄の文化を知りたくて三線をはじめた”32歳の女性など動機はさまざまであるが、68%の人が何かの楽器を弾いたり、現在学習しているという。^(注8)かつては、ピアノやサクソフォーンなどの高価な楽器は、子どもの“情操教育”という名目で購入する家庭が多かったが、今日、大人が自身の楽しみを満たす楽器として買っている。生活が豊かになり、各自が

オカリーナ学習による生涯学習（3）

自分の幸せを求め始める今日にあっては納得のいく現象であろう。オカリーナもこれらの楽器の一つであろうか。

少子高齢化社会に突入した今日において、人々は心身の健康は自分で責任をもって維持しなければならない。最近の中高齢者は、この課題を意識して積極的に自分の「学び」に関わっている。80歳になってもオカリーナを吹き続けている男性など身近なところで自己開発に向けて社会活動している姿を見かける。年をとってからの学習は、理解すること、指を動かすこと、楽譜を読むことなど、時間と忍耐が必要とされる。しかし、家庭の中心として仕事に追われる中高年者に比較すれば、ゆったりとした時間と趣味にかけるゆとりとそれに加えて豊富な経験と、反復継続させる力を持っている。これらの高齢者がくやってくるよかつた>と考える条件が、“みんなが” “いつでも” “どこでも” “なんでも” を備えた学習であろう。オカリーナは、これらの条件を十分に備えた楽器の一つではなからうか。

19世紀のイギリスの哲学者トーマス・ヒル・グリーンは、自己実現について「自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に実現すること。これが自己実現であり、これこそ人生の究極的な目的である。」と述べている。自分の中に本来潜んでいた能力を引き出し、開発させ、深めていくこと、これが人生の究極的な目標であるというのである。その生涯学習を実践していく中で、オカリーナは、人々の生活に潤いと楽しみを与え、生きがいとして、生活の中に入りやすい要因を多く持っている。学習者が、学習を継続させ、奥を深めることにより、自分に対する自信と価値を見出し、それをすることにより自己を開発させていくという生涯学習の目的を実践するものとして、オカリーナは意義のある楽器ではなからうか。

今回の調査から分かったことは、最初のグループでの平均継続年数は、5年6ヶ月であり、そしてグループを止めても60%に人が別な方法で学習を継続させていることである。この現象は、他の楽器でも見られるのであろうか。今後、他の楽器を学んでいる人についての調査をすることにより、オカリーナ学習者の姿が浮き彫りにされてくるのではなからうか。また、オカリーナのさかんなイギリス、韓国の学習者との比較研究を進めることにより、日本の学習者の特徴がもっと明解になるのではないかと考えている。

参考・引用文献

加藤いつみ：「オカリーナによる生涯学習（1）」2001年11月、人文社会学部研究紀要第11号

加藤いつみ：「オカリーナによる生涯学習（2）」2003年3月、人文社会学部研究紀要第14号

安達正嗣：「大都市における高齢者の家族・親族 コミュニケーションに関する調査研究・序報」2001年3月、人文社会学部研究紀要第10号

金子敦子：「大正琴の世界」1998年 音楽之友社

David Liggins：『The ocarina A pictorial History』2004年

注

- (1) 2001年11月、人文社会学部研究紀要第11号
- (2) 2003年3月、人文社会学部研究紀要第14号
- (3) 2003年3月、人文社会学部研究紀要第14号 p. 105
- (4) 人文社会学部研究紀要第14号 p. 98
- (5) 「大正琴の世界」金子敦子著 1998年 音楽之友社
- (6) 筆者による「オカリーナ学習者の一ヶ月の必要経費」の調査による (2000年)
- (7) 「生涯学習入門」丸林実千代著 音楽之友社 1999年 p. 34
- (8) 2003年8月23日 朝日新聞